

フラットパネルディスプレイの 人間工学シンポジウム

- 主 催：ディスプレイデバイス部会、ディスプレイデバイス事業委員会
人間工学専門委員会
- 協 賛：一般社団法人 日本人間工学会
- 担当部署：コンシューマ・プロダクツ部
- 参加者数：約100名

概 要

ディスプレイに関わる市場のより良い発展を目指して3月6日、法政大学小金井キャンパスにおいて「フラットパネルディスプレイの人間工学シンポジウム2015」が、ディスプレイ関連企業、大学、研究機関などから約100名の参加を得て開催されました。

セッション1においては、義務教育のICT化の流れを踏まえたICT機器活用と人間工学ガイドラインの必要性、こどもをめぐるICT化と人間工学の課題のほか、実際の授業における3D教材活用についての報告がありました。セッション2においては、電子フォントの視認性について、高精細化により読書速度が向上すること、フォント自体も視認性に影響することなどが示されました。また、高精細LCDでのフォントの読みやすさと好みさは違うなど、フォントデザインの重要性を明らかにした報告は、今後のフォント、ディスプレイデバイス開発に役立つ貴重な報告となりました。

セッション3における高解像ディスプレイでは、ディスプレイの利用実態を考慮した画素密度の研究をもとに、「4K、8KはテレビよりもタブレットやPCでの活用価値が高い」との報告があり、今後もユーザ視点からの調査研究の深化が期待されます。そのほかセッション3では、高精細映像における立体感の受容特性の報告や、8K/4K/3D映像の医療分野での応用取り組み実証実験紹介があり、多くの参加者の興味を引いておりました。セッション4においては、ビデオシースルー型ヘッドマウントディスプレイ（HMD）を活用した異なる視点からの比較研究報告、映像酔いの生態影響軽減のためのガイドライン作成を目指す報告がありました。生体影

響軽減のディスプレイを利用するシーンは、画面サイズ、環境（明るさ）等、さまざまなシーンで自由度が増えています。映像酔いの要因、メカニズムの解明や評価システム実用化の重要性は今後も増していくと予想されます。

今回は特別講演を2件行いました。一つは黒木義彦氏からリアリティ豊かな表示を目指して、人間の視覚特性と脳の関係、リアリティのために求められる映像特性などについて報告されました。また、もう一つの特別講演では麻倉怜士氏から「究極のテレビ、究極の画質2015」と題して、2015International CESの最新技術動向に見るディスプレイデバイスについて報告いただきました。

講演終了後は講師の方々と直接自由にお話しただけのサロンを設けましたが、50名以上の方々が残られて講師陣を囲み和やかな雰囲気のもと意見交換が行われ、2015年のシンポジウムは幕を閉じました。

来年も開催する予定ですので引き続きご期待下さい。



プログラム

○はじめに

人間工学専門委員会 委員長 久武 雄三 氏

○セッション1/学校教育のICT化（座長：東芝 今井 良枝 氏）

「学校教育のICT活用ガイドライン策定への挑戦」

労働科学研究所 斉藤 進 氏

「小学校の授業における3D教材の活用」

東京福祉大学 柴田 隆史 氏

○セッション2/電子フォントの視認性（座長：ソニー 中枝 武弘 氏）

「文字品種や電子ディスプレイの精細度が日本語文字の可読性に与える影響」

北里大学 川守田 拓志 氏

「高精細LCD上の日本語フォントの読みやすさと好ましさ」

エルゴデザイン研究所 窪田 悟 氏

○セッション3/高解像ディスプレイ（座長：ソニー 長谷川 聡 氏）

「ディスプレイの利用実態から見た画素密度の要件」

エルゴデザイン研究所 窪田 悟 先生

「高精細映像における立体感の受容特性」

日本放送協会 比留間 伸行 氏

「NHK-MTにおける8K/4K/3D映像の医療応用の取り組み」

NHKメディアテクノロジー 栗田 泰市郎 氏

○セッション4/HMDと映像酔い（座長：ジャパンディスプレイ 楊 映保 氏）

「ビデオシースルー型HMDを用いた実写一人称視点と三人称視点の提示とその比較」

法政大学 小池 崇文 氏

「映像酔いの生体影響軽減のためのガイドライン作成を目指して」

産業総合技術研究所 氏家 弘裕 氏

○特別講演（座長：シャープ 富沢 一成 氏）

「リアリティ豊かな表示を目指して」

コンフォートビジョン研究所 黒木 義彦 氏

「究極のテレビ、究極の画質2015」

津田塾大学 麻倉 怜士 氏

○おわりに

ディスプレイデバイス事業委員会 委員 松井 靖幸 氏